

武術の場における身体的同調

——大東流合気柔術を事例として——

田 隰 和 久

一 はじめに

本稿では拙稿「社会学的身体論試論」において「身体を心身——精神（あるいは意識）と、からだ——という二元論としてとらえる思考」の四類型として提示した「からだ統御型心身不可分論」¹の可能性を事例的に考察することを目的とする。具体的には、武術の場における参与観察をつうじて得られたデータをもとに、「動きの質的転換を招来するからだの操法によって精神の転換が必然的に教導される」という「からだ統御型心身不可分論」の可能性を明示することになる。

「社会学的身体論試論」で提示した問題点への対応として、平成十八年七月より大東流合気柔術を主として教授する一刻館（神奈川県川崎川崎市）への入門という形をとり、自己対象化的な参与観察をおこなってきたが、ここから得られたデータへの論考に入る前に、幾つかの点について明確化しておくことが必要であろう。それらは次のように整理できる。

第一に、身体を問題化するに際して、武術の場に着目することが、なぜ妥当と考えるのかという点。

第二に、数ある武術のなかから、なぜ大東流合気柔術が選定されなければならないのかという点。

第三に、諸派に分かれている大東流合気柔術のなかから、なぜ光道系の一刻館を参与観察の場とするのかという点。
これらの点を整理し、「からだ統御型心身不可分論」の事例としての、大東流合気柔術について論じてみたい。

二 問題の所在

まず、第一の点についてであるが、これは身体を問題化する根拠づけに関わるものである。私が身体を問題化する根拠については、かつて拙稿で提示した。しかし、そこでの根拠づけは観念的かつ抽象的なものに止まるものに過ぎなかった。²⁾ そのため、ここでは社会学と接合可能な身体へのアプローチを提示する必要がある。

私の身体へのアプローチは市川浩の指摘に依拠するところが大きい。具体的には、市川の『精神としての身体』における次のような記述を出発点としている。

「感覚というのは、何かものを見るときの場合でも、それは私¹⁾の感覚だという、自己性というか、親しさの感じを常に伴っているわけですね。そういう自己性あるいは親密性が、身体を疎外することによって、感覚から失われていった。物も人も見えてはいるが、見ているという感じがしない。そしてまたわれわれは、感覚を媒介にして、世界とか、他者と同調する、シンクロナイズする、シンパシーをもつという面があるわけですが、それも失われていった」³⁾

この記述において市川は、われわれは身体感覚を媒介として「他者と同調する」ことにより、他者を自身にとっての「リアル」な存在と捉え得る、と同時に、自身の存在をも確固たるものとして認識し得る。という主張をしていると理解できよう。

さらに市川は

「経験の対象であるもの⁴⁾のそのものが変質してきていることが分かります。われわれの経験が間接化してくるということは、経験の対象が映像や言語表象になるということです⁵⁾が、それだけではなく直接経験の対象であるもの⁶⁾自体が、しだいに人工物に変わってきている……自分の身体の肌理に合わない異質な存在という違和感を持っています……それを真だという気持ちと同時に、もっと深い、もの⁷⁾のかかわりを求める気持ちがでてきます」⁴⁾

として、「同調」の希薄化によって自身の世界と自分自身への違和感を抱く、という点を指摘している。

この「他者との同調」は、三砂ちづるが指摘する、産婦人科における医療行為としての「不自然な」出産に起因する女性性への否定的な見解の創出と、助産所における出産にみられる他者（ここでは胎児・子ども）との「同調」の帰結として獲得される身体知と⁵⁾

軌を一にするものと理解すべきである。

他者との「同調」とはレベルを異にするが、男性の日常から抽出され得る、ものとの「同調」の希薄化の事例として、髭剃りをあげることできょう（ものとの「同調」・他者との「同調」に差異が認められ得るか否かについては、後述する「四 大東流合気柔術にみる『他者との同調』」において論じることとする）。肌と髭の角度がヘッドの稼動により使用者のそれに合ったように調整される——あるいは固定されたヘッドにより使い手による調整をほとんど必要としない——いわゆるT字剃刀においては、使用者は剃刀との「同調」を意識する必要はない。そこでは、剃刀を肌に沿って滑らせることによって、「髭を剃る」という目的を達成することが可能である。これにたいして、いわゆる日本剃刀・西洋剃刀などをはじめとするI字と称される剃刀においては、使用者は自身の指先と刃先を「同調」させ、刃先をつうじて肌の凹凸、髭の方向と角度を感じつつ「髭を剃る」ことが必要であり、そこには、道具と自身の「同調」と、「同調」した道具を介して自分自身を知るという営みをみることができ⁸⁾る。

こうした他者との「同調」を語る際、男女共通の問題としてのセックスを事例化して取り上げることが合目的と考えられる。しかし、近年見られる「スローセックス」の主張においては、「肉体・精神を含めて他者に自己を委ねられない」セックスを「不感症」であると指摘しながらも、基本的には射精⁷⁾セックスという男性中心の快楽にもとづく性交観を払拭し、男性が女性を「イカせる」テクニクの習得を提唱しているに過ぎない⁸⁾。こうした点を踏まえるならば、スローセックスは他者との「同調」とは無縁なものであるといわざるを得ない。

先に言及した三砂も

「自分が勝手に相手をつつけられるようなエネルギーのある『メス』だったらよいのですが、そうでない人は、そういう『誰かとつながりたい』という思いが宙ぶらりんなまま、一生を過ごしていかなければなりません……今、スピリチュアルなことを若い女性が求めている、とよく聞きます。からだで経験できないことを、そういう本を読んだり、話を聞いたりすることで補⁹⁾っている」

としてセックスを問題化している。三砂は、こうした「からだで経験できない」ことへの対応として「ポリネシアンセックス」という事例を提示しているが、この事例を普遍化することには問題があろう¹⁰⁾。貝原益軒の『養生訓』における「精気の浪費¹¹⁾」を、ポリネシアンセックスとの同一線上に読むことが可能ならば、こうしたアプローチもありうるとは考えるが、現時点でこうした点を確認

する根拠づけを得るには至っていない。¹²⁾

また、文化的に共有したいという以前に、

「ひたすら近代化をめざしたフェミニズムが置き忘れてきたもの、それは女が女である至福とは何かという問いの答えである。女が男と同等の人権的平等を持つこと、それは当然のことだ。だが、女は男と『同じ』ではない。男ができることの大半は女にできるし、男性的な回路で思考することも十分にできるが、女にしかできないことがあり、女にしか体感できないものがある。

それが女のエロスであり、女の官能だ、女という身体を通していたりつくことのできる楽園」¹³⁾

という宮迫千鶴の記述に触れるならば、生物学的かつ男女間での感覚的な差が前提とされるセックスを普遍的な事例と設定することには困難があるといわざるを得ない。

しかし、なぜ「同調」の希薄化が問題視されなければならないのであろうか。こうした問いにたいして、私は、リストカット、刺青、スカリフレーション、スプリットタンといった「痛みや皮膚への刺激をアイデンティティ確認の手段として求めていく現象」を、「同調」希薄化の延長線上に位置するものと考ええる。

たとえば刺青については、ファッションのひとつとして捉えられがちであるが、「図柄や美的なレベルとは違ったレベルの満足。満ち足りた何か、解き放された何かが自信をつくっている」¹⁴⁾、あるいは「まったく次元のちがう日常をつくりだす。息のしかたからしてちがう、からだのメカニズム自体が変わったことを発見する。体温だけでなく、からだ自体が変わる。変化はからだだけにとどまらない。あるとき、人との接し方まで変わったことに気づいた」¹⁵⁾という入墨者の発言からは、刺青をアイデンティティ確認の手段とする姿を垣間見ることができる。

市川における「感覚を媒介」とは、もの・他者との「同調」であるが、私は、現代社会においては「同調」の希薄化の帰結として、「痛み」や「刺激」といった自己完結的な感覚への希求、言い換えるならば「内的五感への埋没」とでもいうべき事態が進行しつつあると考える。「自分自身の確かさを確認するために、自分の身体を傷つける」という痛みをもってしか自身のアイデンティティを確認・確立できない¹⁶⁾という事態はこの典型であろう。既述した「スローセックス」の提唱も「内的五感への埋没」の同一線上にあるものと位置づける。

さらに、「回想をうながす思い出キット」あるいは、「バブル・ユニット」などによって構成されるスヌーズレン空間への着目は、¹⁷⁾

ものとの直接接合をすることによる、ものとの「同調」を取り戻す試みと位置づけることができよう。

しかし、既述してきた事例は、性による規定性が不可避であったり、われわれの文化的文脈から抽出することが困難な事例といわざるを得ない。これにたいして、武術は本来的には「術」であり、「本能的な動き」とはことなる術で他者にたいするといふものである。言い換えるならば、社会的文脈のなかで再構成された身体操法をもって、性の規定性を受けることなく他者と向き合うものであるといえる。さらに、武術の場を構成するに際しては他者という存在が不可欠である。と同時に、武具を用いるという場面を考えたととき、ものとの「同調」も同時に語り得るという点に着目した。

三 大東流合気柔術⁽¹⁸⁾について

ここでは、数ある武術のなかから大東流合気柔術を選定した根拠と、諸派に分かれている大東流合気柔術のなかから、なぜ光道系の一刻館を参与観察の場としたかという点について論じてみたい。

まず、前者の問いにたいしては、「武術であるならば、大東流に限定する必要があるのではないか」という指摘が想定されるが、こうした指摘には、先に述べた自己完結的な感覚への希求、「内的五感への埋没」という観点からこたえることができる。

小山隆英は、武術の近代化を剣術の剣道化という観点から捉え、

「近現代剣道の技術指標や身体観は、近世以来の在地諸流派の伝統技術とは断絶したものであり、伝承の断絶は、昭和期の県内の高名剣道師範達が、郷土の近世流派剣術師範達の名を『全く知らない』と述べていることも証左となろう。

そしてその身体は、歴史的に個々に受け継がれてきた差異性を持つ近世剣技伝承群が、近代以降の新たな担い手によって、近代社会の要求である試合競技運営や学校の集団一斉指導という場で、一定認識とルールを共有した同会派同志が行う競技性の高い全国的システムへと転換することを通じて全国的に普及していった存在であるといえよう。その全国的な流行性には、自由に打ち合える楽しさがあったという分析がある。

このような変化から産まれた近・現代剣道は、現在も特性である可変性を持ちつつけている。技術面ではランニングやマシントレーニング、イメージトレーニングやコンディショニング作り、スポーツ栄養学、コーチング方法の導入が、組織としては数年毎

の試合ルール改良、用具の規格化、トーナメントやリーグ戦による効率的な大会競技運営法の研究、観客論など、先端的欧米スポーツ理論導入や現代社会の要求に対応¹⁹⁾」

していく姿について論及している。

これと同様の状況は、柔道においても見ることができ。嘉納治五郎はかつての「乱取の指導の仕方は、よほどその理想に近いもので、今日一般に行なわれている講道館柔道の仕方とはよほど違ったものであった²⁰⁾」として、乱取（稽古）の崩れについて言及している。この崩れの原因として「規定によって勝負を決するということになると、自然その規定になじむの弊として、勢い理想的の身体の姿勢とか、こなしとかいうことに遠ざかってくる²¹⁾」という点を指摘している。これは、小山が指摘する「競技性」に端を発する武術の近代スポーツ化と同一線上にある問題として捉えることができる。嘉納はこの弊害克服の方途として、

「武術からいうても、いつ相手が蹴ってきても、突いてきても、体をかわすことも出来、身体が自由にかつ軽快・敏捷に動くということではなければならぬ。講道館では、乱取をする際、襟をつかみ袖を捕らえて稽古をするが、これは初心者を導くに必要なので、これを最後まで用うべき形というのではない。仮りに袖を捕り襟を握っても、きわめて軽く握り、これに力を入れてはいかぬ。しからざれば、急速に身体をかわすことが出来ない²²⁾」

と、「力み」の排除という点を強調している。しかし、「日本の昔の武道には、いわゆる殺傷性があり、無限定性があるんですね。方法、手段において限定がないんです。だから現代の平和時代にあつて、将来に向かって武道の良い面を世界的に広めるためには、競技化するのが最良の方法だと思うのです²⁴⁾」という、嘉納以降の柔道家の言をみるならば、「柔道をスポーツにしてはいけない」という嘉納の意図²⁵⁾を超えて、柔道における近代競技化は不可避であったといえよう。

こうした近代スポーツ化した武術（武道）にたいして、「伝統的な技は完成されたものであり、それを改変してはいけない²⁶⁾」といった見解を固持する古武術や、合気系と称される武術では、ランニング、マシントレーニングによる筋力強化と「力み」の排除という二律背反は問題化されえないといえる。むしろそこでは、「持っている力を捨てる必要はない、力を捨てると脱力状態となり、稽古とはならない。どんなに筋力の強い人でも、光道の稽古をすると力を使う必要がなくなる²⁷⁾」として、技の修得から結果的に筋力強化が可能となることはあっても、筋力強化が術の修得そのものである稽古と同義となる、という思考法が回避されているように思われる²⁸⁾。

こうした違いから、先に見た、もの・他者との同調の希薄化という問題を見ることができると考えられるのではないだろうか。嘉納は古流柔術である起倒流の免許皆伝契機となった自身の境地を次のように述べている。

「人の身体は、押すか引くかすれば必ず崩れるものであるということである。何心なく、ふと立っておるものは、その人が如何に体力のあるものでも、前から押せば後ろに傾き、またこれを引けば前に傾く、即ち崩れる。もし相手が体力のあるものでも、こちらの押すのを押しかえせば、後ろには崩れない。また、引くとき引き返せば、前には崩れない。しかし、いかに体力のあるものでも、自分に引こうとするときに、こちらから押せば、後ろに必ずよろける。こちらを先方が押すとき、こちらが引けば、前によろつくことは間違のないことである。そこで原則は、引くか押すかを巧みにすれば、引く作用または押す作用によって、相手の安定を奪い、必ず動揺させることが出来る。わざは相手の身体が安定をかきたるときにかかるのであるということである」⁽²⁹⁾

ここで述べられている身体操法では、自身の筋力に依拠して相手を倒すのではなく、「押さば引け、引かば押せ」という相手の動きにどうついていくか問われているといえよう。とするならば、本来的に武術においては「もの・他者との同調」が問われおり、これにたいして、近代競技化した武術（武道）においては、自身の筋力で他者を制することが求められている。言い換えるならば、前者においては「もの・他者との同調」が問われているが、後者においては、「力」という自己完結的な感覚への希求をみる事ができる。ただし、この「抜けた」感覚⁽³⁰⁾「同調」は柔道・剣道をはじめゴルフなどのスポーツ全般において観察しうることであるが、当初から「同調」を目的とする合気系武術と、精神を身体に対立物としてとらえ、もの・他者の統御としての自己完結的な筋力強化の帰結として獲得可能な「抜け」とは、他者の身体をどのようにとらえるかという点において隔絶があるように思われる。⁽³¹⁾ また、「武術を始めるに、年齢は関係ありません。どのような年齢であっても、必ずなんらかの発見があるはず」⁽³²⁾という発言は、近代競技化した武術としての武道とは相容れない側面をもつものと位置づけられるのではないだろうか。

こうした点から、「力み」忌避する古武術・合気系武術においては「もの・他者との同調」を、近代競技化した武術⁽³³⁾においては希薄化、という相対する局面を観察することが可能といえる。

では、なにゆえに合気系に属する合気道ではなく、大東流合気柔術である必要があるのだろうか⁽³³⁾。合気道開祖、植芝盛平の「合気道の精神は至妙至高の境地であって、言葉や文章では本当のところは説明できぬ。これは一に修業^(マツ)により体得しなければならぬ」⁽³⁴⁾という言葉からは、「合気道の精神は修業^(マツ)により体得されるもの」であり、私の指摘する「からだ統

御型心身不可分論」につうじる思考方法をみることができる。しかし、「合気道の極意は、己を宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある」⁽³⁵⁾といった植芝の発言においては、術ではなく精神面への言及が高い比重をもち、精神性・精神世界が重視されているように思われる。このことは「大本教の信仰とか大先生の精神的修行によって合気道の特徴というのが出てる」という直弟子の発言、あるいは植芝の口述である『武産合気』が白光真宏会から出版されていることなどからも、植芝の精神世界へ傾倒する側面をみることができる。こうしたことから、合気道においては理合いの説明が植芝の「神秘体験」と不可分な関係にあることから、必ずしも正確な理合いの伝承行われていない可能性がある。甲野善紀の「開祖植芝盛平翁は昔の武術の達人を髣髴とさせるようなエピソードを持っているのですが、どうやってそこに至ったのか、今そこまでできる人がいるのかという問いへの答えが得られなかった」⁽³⁸⁾という指摘も、合気道のこうした側面に向けられたものといえよう。

これにたいし、諸派に分かれた大東流のなかでも、武田惣角―堀川幸道の流れを汲む合気柔術においては、「敵の力をとり、その動きを封じ無力化する技術」とされる「合気」の感覚を磨くことが重視される⁽³⁹⁾。後述するように、私はこの「合気」の修得過程を「もの・他者との同調」、および「からだ統御型心身不可分論」の事例と考えてみたい。現在私が参与観察を行っている一刻館の館長大崎司善師は、武田惣角―堀川幸道―錦戸武夫―大崎司善という系譜に位置している。また、光道総師範である錦戸武夫師は植芝と酷似した「光の体験」を有しており⁽⁴⁰⁾、「大東流合気柔術は解脱の武術である」⁽⁴¹⁾と称する。しかし、錦戸師のなかでは植芝とは異なり、「光の体験」と大東流の理合いとは明確に区別されているように見受けられる。このことから、光道系の大東流合気柔術には、拙稿において提示した武術における「もの・他者との同調」の帰結としてみられる神秘主義的側面にたいして距離化を図りつつ、「からだ―精神相互浸透型」アプローチに言及することの可能性が内包されていると理解している。

四 大東流合気柔術にみる「他者との同調」

一刻館（以下、道場）における参与観察（以下、「稽古」と同義とする）は二〇〇六年七月九日から開始した。長期に亘って稽古から遠ざからざるを得なかった期間もあるが、自己対象化により身体感覚の変化を記述することから、一週に三ないしは四回の稽古をとおしてデータ収集をおこなうよう留意した。データ収集の方法としては、道場における大東流の稽古をつうじて、自分自身にど

のような感覚の変化（同調）が生じるか、また稽古時に限定することなく、道場における対話から、身体接触としての技および身体操法・身体感覚の転換をつうじての他者との「同調」が、どのような言葉で伝達・共有されているかを中心に観察をおこなってきた。さらに、必要に応じて大崎師・他門下生へのインタビューをおこなうことで、感覚の変化や共有される言葉の意味解釈が、私の主観的解釈に偏ることがないように心がけた。なお、このインタビューは、特別な事情がない限りは、稽古後に大崎師をはじめとする道場関係者との自然な会話のなかでおこない、データにバイアスがかかることを極力回避するよう努めた。

一刻館において技の習熟度は、初傳之入―初傳之奥―中傳之入―

中傳之奥―奥傳之入―奥傳之奥という六階梯に区分されているが、初伝においては「基本稽古で氣の体を作⁽⁴⁾」ることが企図される。

初傳之入では、

横面打

正面打

手鏡

上段突

中段突

四方抛

肩擲

胸擲

といった八つの技が修得の対象となるが、これらの技においては、他者を力で制するという作為が忌避され、攻撃者である他者の動きについていくことが重視される。たとえば右の写真にある第一條の「横面打」は、こめかみを殴打してきた敵の手を捕り、その手の落ちるままについていくことにより敵を崩す技であるが、この技の修得過程においては、「相手は落ちたがっています。その重さを感じて、それについていくだけです」⁽⁴⁵⁾、「この手は落ちたがっています。相手を追い越さずに、相手についていって下さい」、「落とそうとする作為が働いています」といった言葉で、技を極める際の身体感覚が表現される。

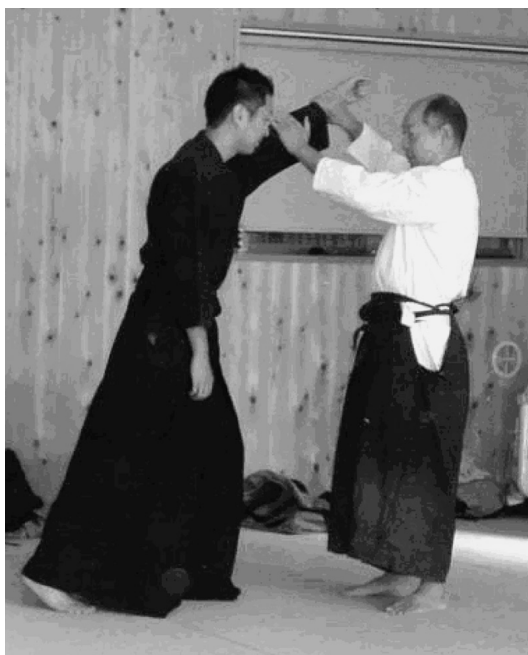


写真 1

「横面打」のみならず、初傳之入の技においては、自分を中心とした「力み」の感覚ではなく、相手の落ちたい方向に自身がついていく、という意味での「同調」が重視されるといえる。「追い越す」とは自己中心的な「力み」によって「同調」すべき相手⁴⁷の攻撃者を見失った状態を表現するものであるといえる。なぜこうした「同調」により攻撃者を崩すことができるのかは理解できない。しかし、技をかけられた感覚は、攻撃者は倒そうとそうとする相手に「合わせられる」ことにより、自分自身の拠りどころを奪われ、攻撃対象と攻撃者である自身が一体化させられることによって、身体の拠りどころを崩壊・消失させられ、抵抗することが不可能な状態に陥れるとでもいべきものである。⁴⁸

こうした感覚からするならば、初歩段階における「気」とは、「力み」を捨てた他者との「同調」といいうるのではないだろうか。当初「気」については、『養生訓』にみられるように、体内で練り、蓄積、消費するものであると考えていたが、「気が減ることはない⁴⁷」という錦戸師の表現と合わせて考えるならば、神秘主義的な文脈ではなく、「技」として理解すべきであろう。

また、この初期の段階に「ひとり稽古」を余儀なくされた期間が生じたが、基本技の理合いが修得できていない段階において、他者をつうじて自分自身の動きを確認できないこと以上に、「自分自身の心身を確認できない⁴⁸」という状態にもどかしさを覚えるということが経験された。

第二階段の初傳之奥では、

圓相

残月

曳捨

拍手

綾取

落（三本）

合氣拳

の七つの技を修得する。

ここでは、豆腐に串を刺し、その串が豆腐を崩すことがないように運ぶ、とでもいうような感覚。自身が串と一体化し、串をと

して豆腐を感じ続けながら運ぶような感覚が重視される。豆腐の重さを力のみで処理しようとするならば、串が豆腐を崩してしまう。豆腐を崩さぬように運ぶためには、常に串をとおして豆腐全体を感じ続けて運ばなければならない。言い換えるならば、重さという圧を感じたとき、本能的に筋力でこれ进行处理するのではなく、技——ここでは豆腐（もの・他者）との一体化——としてこれ进行处理することが必要とされる。

初傳之入においては、「相手を追い越さずについていく感覚」が問題とされていたのにたいし、初伝奥の修得過程では、「掴みにきている（相手の）この手を感じ、その感じが消えないように、この手を運んでください」、「頭で考えるのではなく、掴みにきている（相手の）手——または触れている部位——を感じてください」、「その感じを最後まで感じ続けてください」、「（技をかけるあなたが）消えてしまいました」、「（技をかけられる私を）見失いましたね」、「頭で考えては駄目です。感じてください」、「（掴んでいる部位から）あなたの気持ちを感じられません」といった表現を用いることで、身体感覚の共有と伝承がおこなわれている。この「運ぶ」、「感じ続ける」、「消える」、「見失う」という表現は、この階梯におけるすべての技に共通する身体感覚であるといえる。特に、「消え



写真 2



写真 3

る、「見失う」という言い回しは、技の過程で他者との「同調」の希薄化が生じた瞬間、言い換えるならば、自身の「力み」感覚に埋没し、敵対する他者とぶつかり合う瞬間を指摘する言葉として捉えられている。こうした点から、初傳之奥においては、技の起点となる敵の攻撃から技の帰着点である敵の崩れまでの間、常に相手と「同調」し続けるということが問われる。⁽⁴⁸⁾

前頁上段の写真2は大崎師(写真左)による座捕りの「合氣拳」である。大崎師が正面からの敵に自身の手を掴ませているが、大崎師の手を掴み上半身で制そうとしている私(写真右)は、前傾し肩からの全体重を大崎師に乗せている状態である。これにたいして、前頁下段の写真3は、攻撃者である私を大崎師が「合氣拳」で制しているところである。ここでは、上段写真2では制していたはずの私の肩が浮き、力みのない大崎師の動きに制せられていることが分かる。また本頁の写真4は立ち捕りによる「合氣拳」であるが、力みのない大崎師に崩され、かつ制されている様子を、座捕り以上に明確に確認することができる。

この「合氣拳」においては先に述べたような「豆腐に串を刺し、その串が豆腐を崩すことがないように運ぶ」⁽⁴⁹⁾という「同調」しつつ制するという感覚が重視され、筋力に依拠した「力み」、「内的五感に埋没」した自己中心的な動き、すなわち「同調」の希薄化の排除が課題とされている。



写真4

さて、ここまで論じてきた「同調」は、对人的なそれに限定されるものであるが、こうした「力み」を排した「同調」は抜刀術においてもみることができる。木刀でおこなわれる抜刀術の組立ちにおいて、仮想敵である打太刀が木剣を自身の眼前に水平に構える。使太刀は打太刀の構えた木剣を打太刀の肉体そのものとみなし斬撃を加えるという場面がある。この場面において、使太刀が力任せの斬撃を加えた場合、使太刀の木剣は打太刀がただ構えるだけの木剣に弾かれてしまうか、使太刀と打太刀の力が拮抗する位相で斬撃が停止してしまう。

これにたいして、使太刀が「力み」を排除し、振り下ろされる木剣が落ちようとする方向——剣が欲する方向——についていくだけの斬撃をなし得たときに、はじめて刃筋がとおり打太刀の構える木剣が抵抗なく大地へ斬り下げられる（これは巷間でいわれる「剣の重さで斬る」ということではない。あくまでも「剣の行きたい方向をコントロールすると同時に、剣についていく」という「技」としての斬撃である必要がある）。

当初は剣術においては、使太刀は剣と「同調」し、その上で剣をとおして打太刀と「同調」するという図式を構想していた。しかし、大東流では身体を剣に見立てた感覚を指摘する場面がしばしば見られる。例えば、初傳之奥の「圓相」においては、手刀で斬る感覚が問われる場合がある。こうしたことから現時点では、重層構造的ではなく、「もの・人」いずれかとの「同調」が起こったときに技が顕現すると考えてみたい。

しかし、なぜ「力み」を排除した「同調」により、こうした技が可能になるかという点について言及する術を持たない。武術のもつこうした側面について光岡英稔は「考えずに動きなさい」と言われます⁽³²⁾という点を強調し、「体認」という概念を提示することによってこたえようとしている。

「思考で考えてしまうと、複雑な相関関係が無視され、単純で平面的な『あれ』と『これ』の関係になってしまいます。そして同時にその関係が固定化され、絶対化されてしまうのです。ですから『体認』するといっても、何か特定のものを認識するわけではありません。何かよく分からない掴みどころのないものを、そのままに把握する必要があるのです」⁽³³⁾

この光岡の指摘からは、技の修得は、技を修得した他者を通しての体認によってのみ可能であり、技のプロセスを分析し論理的に理解する試みは忌避されるという見解を導き出せるであろう。この見解は、大東流の技の伝承に際して共有されている語群からも裏づけられるであろう。また、理合いを論理で理解することにより、身体で感じる「体認が阻害され技がかからなくなり、修得のベースが鈍化する」という現象も、論理的な理解が体認を妨げるという点から説明可能なように思われる。

以上、大東流の稽古を事例として論じてきたが、こうした「同調」や「体認」をとおして、「身体は精神の後にくる」というのではなく、精神は身体の内にある。身体を用いて技を深めていけば、必然的に意識の動きというものに気づく⁽³⁴⁾と結論づけることが可能であろう。たとえば、「合氣拳」は動作としては、腕を掴んだ相手の手を処理することによって相手を崩すということになるが、技としては腕を掴み圧を加えてくる相手の手を意識するのではなく、相手の手を感じつつも自身の身体先端に意識を働かせるもので

あるといえる。そこでは、身体を用いて技を修得していく過程——理合いの体認——をとおして、意識を身体の隅々にまで充溢させること（からだ統御型心身不可分論）をみることができ⁽⁵⁵⁾る。

こうした点からも、私は体認によって修得可能な「術」を中心とする「武術」と、近代競技化した「武道」とを区別して論じるべきであると考え⁽⁵⁶⁾る。

五 今後の課題

以上、市川の「もの・人との同調」を手がかりとして、大東流合気柔術から「からだ統御型心身不可分論」を導き出したが、最後に、これまでの論述のなから提示される問題点を整理しておこう。

第一に、市川の「もの・人との同調」の無前提な受容という点を指摘することができよう。これは今後身体をめぐる学説史への論及を踏まえた上で再検討する必要がある⁽⁵⁷⁾う。

第二に、大東流合気柔術を事例として論を展開してきたが、さまざまな武術関係書の用語が整理されることなく使用される結果となっている。具体的には、「体認」、「同調」、「五感への内的埋没」、「自己完結的な感覚」、「身体知」などがあげられる。さらに「精神」、「意識」、「感覚」についても、論述箇所によって微妙な使い分けがなされる結果となってしまった。これらの用語については、概念規定と用語相互の関係が等閑にふされ、体系的に欠いた論考となっている点を指摘することができよう。

第三に、「からだ——精神相互浸透型」についての論及がされなかった点。この点については、南郷継正の「質量転化」、「心と技の相互浸透⁽⁵⁸⁾」という点に示唆を受けながらも論じるに足る考察を加えることができなかった。

第四に、拙稿で指摘した神秘主義的な問題についての論及にいたらなかった点。特に植芝の「神との一体観⁽⁵⁹⁾」は、多数の合気関連図書で語られている⁽⁶⁰⁾。また、光道の錦戸師も植芝と酷似する光体験を有している⁽⁶¹⁾。ただ、ここでは、こうした武術家の神秘的な体験を、「スピリチュアリズム」という言葉で括することには問題があるという点のみを指摘しておきたい。

むしろ、ドナルド・キーンが指摘するように、日本人の世界観としての「もののあはれ」、言い換えるならば、存在をどうとらえるか、ものへの敏感・鋭敏な感覚という視点から論じることが妥当ではないかと考える。ただし、第一の課題とも関連するが、学説

史の整理と、自身の論考をそれらとの関わりから論じることが必要であろうが、ここでは、こうした日本人の世界観にかかわる身体の問題を、非東洋社会の理論を用いて分析することに、疑問と違和感を覚えるだけ述べておきたい。

注

- (1) 田嶋和久、「社会学的身体論試論」、『立正大学文学部論叢』一二二号、二〇〇四年、参照。
- (2) 田嶋和久、「特別研究員研修成果報告 特別研究員研修を終えて」、『立正大学文学部論叢』一二〇号、二〇〇五年。および、田嶋（二〇〇四）参照。
- (3) 市川浩、『精神としての身体』、講談社学術文庫、二〇〇四年、一九頁。
- (4) 市川（二〇〇四）、三〇—三二頁。
- (5) 三砂ちづる、『オニババ化する女たち 女性の身体性を取り戻す』、光文社新書、二〇〇五年。および、内田樹・三砂ちづる、『身体知 身体が教えてくれること』、バジリコ、二〇〇六年、参照。
- (6) この記述は、板橋勇仁、「待つ身体 経過していく身体」、『知の軌跡 二〇世紀を顧みる』、北樹出版、二〇〇四年から示唆を受けるところが大きい。
- (7) 宮迫千鶴、『官能論 祝福としてのセックス』、春秋社、二〇〇六年、五四頁、参照。
- (8) アダム徳永、『スローセックス実践入門』、講談社＋α新書、二〇〇七年、参照。この書籍は「彼氏に読んでもらいたい本ナンバー1です」というキャッチコピーが付されているが、「スローセックス」を「イカせる」テクニクと捉える傾向は女性においても同様にみられる。女性誌である『an・an』（マガジンハウス）では、二〇〇七年八月号（No.一五七二）において「SEXで恋がときめく」という特集が組まれ、そこにおいても「スローセックス」が提唱されている。しかし、記事の大半は「いかにしてイク身体になるか」という点を問題視しており、異性との「同調」＝自身が「イク」こととして理解されているに過ぎない。こうした記述は、「同調」希薄化の事例的資料とはなりえても、現時点では同調希薄化による問題点を抽出するという視点とし難いと考ええる。
- (9) 三砂（二〇〇五）、一四七—一四八頁。
- (10) この論法は三砂に特徴的なものという訳ではない。ジェイムズ・N・パウエル性交についての考察（浅野敏夫訳、『エロスと精気 性愛術指南』、法政大学出版局、二〇〇五年）や、阿部輝夫の指摘（『セックスストレスの精神医学』、ちくま新書、二〇〇四年）に同様の指摘や意図を見ることができる。
- (11) 貝原益軒・伊藤友信訳、『養生訓』、講談社学術文庫、二〇〇五年、一三八—一四五頁参照。
- (12) ただし、貝原益軒においては「心は人身の主君也。故に天君と云。思ふ事をつかさどる」（伊藤訳、二〇〇五、一四六頁）という記述がなされており、益軒の身体観が東洋的な心身不可分論に立脚するものであるかには疑問がある。

- (13) 宮迫千鶴、『官能論 祝福としてのセックス』、春秋社、二〇〇六年、三四頁。
- (14) 斎藤卓志、『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるか』、春風社、二〇〇五年、四六頁。
- (15) 斎藤(二〇〇五)、五〇頁。
- (16) 山下柚実、『五感 再生へ 感覚は警告する』岩波書店、二〇〇六年、一三頁参照。ここで問題視するのは「他人に見せびらかしたり、だれかと競い合って改造するのではなく……自分の気に入った形に身体を変えて生きたい」という「改造系」としておく(山下(二〇〇六)参照)。
- (17) 山下(二〇〇六)、三〇—三四頁参照。
- (18) 大東流の起源について流派内では、ほぼ次のような成立史が共有・伝承されているが、史料的な観点から、中興の祖である武田惣角により創始されたという見解も見られる。ただし、本文で後述するように、大東流を対象とした理由は、こうした古流としての伝承に重きをおいたわけではない。
- 「大東流合気柔術の起こりは、清和天皇の第六皇子・貞純親王にあると言われ、親王の長子・経基を経て『源家』に代々伝わり、満仲、頼義、義光と続き、源義家の弟・新羅三郎義光によって基礎がつくられた。新羅三郎義光が極めた『大東流合気柔術』は源家に伝わる秘法(手乞)を起源とする。手乞は相撲の始めとも言われている。手乞によって天皇を守護する形が、清和天皇の第六皇子・貞純親王から始まる清和源氏に継承されてきた。義光は女郎蜘蛛が自分より大きい獲物をからめ取る手練、戦場で兵士の屍体を解剖し、骨格の組み立てを調べ、人体の仕組みを研究し、『大東流合気柔術』を集大成した。義光は幼少の頃、近江の「大東の館」に住し、大東三郎とも呼ばれていたことから『大東流』の呼称がはじまったといわれている。義光は『後三年の役』の戦功で『甲斐守』に任ぜられ、次男義清に家督を継がせ、義清の孫信義のとき、甲斐の北巨摩郡武田荘に住んで、武田氏を名乗った。これが甲斐武田氏の始まりで、以来大東流は武田家秘伝の武芸として、『門外不出』のまま代々『武田家伝』として伝えられた。武田信玄の死後、天正二年(一五七四)に信玄の一族武田国継が会津に下り、芦名盛氏に仕え、地頭になり清寧寺の守護神社『伊勢宮』の宮司を兼ねて会津に定着した。武田国継が伝えた大東流合気柔術の秘奥・小具足をその子孫が受け継ぎ、『会津御留技』となり、藩内にのみ伝えられた。江戸時代になり、秀忠の第四子が保科正光の養子「保科正之」となり、山形から会津二十三万石の領主となる。保科正之は家光の遺命により將軍家綱の補佐役兼後見人となり、会津御留技の大東流合気柔術を殿中護身武道の『御式内・御敷居内』(おしきうち)に改定採用し奥勤務者、重臣に指導した。保科正之は以後の会津の歴代藩主に小野派一刀流と御式内を継承させた。特に御式内の指導については上席家老の西郷家に委ねた。こうして御式内は西郷家で門外不出の秘伝として、会津の重臣たちに伝承されていった。その後世に知られずにはいたが、明治になって元会津藩家老・西郷頼母(保科近恵)から武田家の末孫・武田惣角を経て今日に至る。」(大東流諸派の主張をもとに文章化した)
- (19) 小山隆秀、「身体技術伝承の近代化——旧弘前藩領における近世流派剣術から近・現代剣道への変容について——」、青森県民俗の会編『青森県の民俗』第3号。この他、現代剣道における「摺り足」と古流における「撞木足」等の身体技法についても言及がなされている。
- (20) 嘉納治五郎、『嘉納治五郎——私の生涯と柔道——』、日本図書センター、二〇〇六年、五四頁。

- (21) 嘉納(二〇〇六)、五四頁。
- (22) 嘉納(二〇〇六)、五五頁。
- (23) この他、松原隆一郎は、柔道における「技の本質」追求の希薄化を、講道館を中心とした組織化と近代スポーツ化することによる勝利至上主義という点から分析し、「技の本質」を追求する町道場と勝利を至上命題とする講道館柔道の間の矛盾点を指摘している(松原隆一郎、『武道を生きる』、NTT出版、二〇〇六年)。
- (24) 合気ニュース編集部、『決定版 植芝盛平と合気道 I』、合気ニュース、二〇〇六年、五九頁(柔道家でもある富木建治の言)。また富木は「柔道の場合は基本構造を忘れつつある。レスリングの選手が、ちょっと柔道の胴着を着て柔道のルールに合わせてやって、それがたまたま強いということもある。ヘーシングとかルスカとかが出てきたわけです。そうするとそれに(基本構造が)ゆるがされてしまう。(略)柔道がレスリングの基本構造にもっていかれている。姿勢が悪くなったと。基本構造が崩れてくるんですね。競技というものは」という指摘もおこなっている(同書、六九頁)。
- (25) 合気ニュース編集部(二〇〇六)、九七頁。
- (26) 二〇〇五年九月七日、琉球王家秘伝本部御殿手、聖道館館長上原健志氏へのインタビュー。ただし、改変することなく技の伝承を行なうことと、現代格闘技への対処という観点から技の習得課程を再構築することは分けて考えるべきであろう(二〇〇六年十二月二十四日、大東流合気柔術光道、総師範錦戸武夫師へのヒアリング)。
- (27) 錦戸武夫、『合する合気 光道 上巻』、大東流合気柔術光道製作、参照。
- (28) ここでは「合気鍛錬を支えていたのは、先生の『堅固な意志』『強靱な精神』に他ならない。『人間は、精神が一番大事だ!』と、先生が常々言われていたように、人間は本来精神によって肉体を支配するべきなのだろう」(高橋賢、『佐川幸義先生 大東流合気の真実』、福昌堂、二〇〇七年、三一六頁)という見解を否定する意図はない。修行としての武術の場における禁欲的鍛錬を否定すべきではないであろう。しかし、大東流にみられる「同調」という特性は、近代競技化した武道と比べると注目すべき点であるといえよう。私はあくまでも「からだ統御型心身不可分論」という観点からの大東流へのアプローチにこだわってみたい。
- (29) 嘉納(二〇〇六)、五一頁。
- (30) 一刻館館長大崎司善師へのインタビュー(二〇〇七年一月二八日)。
- (31) 時津賢児、『武道の力』、大和書房、二〇〇五年、五頁、参照。
- (32) 二〇〇五年九月七日、琉球王家秘伝本部御殿手、聖道館館長上原健志氏へのインタビュー。上原氏の発言の多くは第十二代宗家故上原清吉の言葉として氏が語ったものである。
- (33) 大東合気柔術と合気道との関係については、合気ニュース編集部、『改訂版、武田惣角と大東流合気柔術』、二〇〇五年参照。両者の関係については諸説あるが、ここにおけるスタンレー・プラニンの論及は、中立的な立場から論及がなされ、客観性が高いと思われる。
- (34) 植芝吉祥丸著、植芝盛平監修、『合気道―復刻版―』、出版芸術社、二〇〇二年、一三三頁参照。

- (35) 植芝(二〇〇二)、五一頁参照。
- (36) 合気ニュース編集部、『決定版 植芝盛平と合気道 II』、合気ニュース、二〇〇六年、九七頁。
- (37) 高橋英雄編、『武産合気』、白光出版、二〇〇六年。この他、合気系武術を神道を結びつける著作として、清水豊、『古事記と植芝盛平——合気道の神道世界——』、ビイング・ネット・プレス、二〇〇六年。大宮司朗、『古武術と身体——日本人の身体感覚を呼び起こす——』、原書房、二〇〇三年。などがあげられる。
- (38) 甲野善紀、『古武術に学ぶ新体操法』、岩波アクティブ新書、二〇〇四年、七二頁。植芝のエピソードとしては「モーゼル拳銃をさし向けられ、相手が引金を引く前に、その想念の動きが小さな玉となって自分にぶつかったと意識して、一瞬早く相手の手許に飛び込み、機先を制した」(植芝吉祥丸著、植芝盛平監修、『合気道——復刻版——』、出版芸術社、二〇〇二年、四五頁)などがあげられる。
- (39) 清水豊「堀川幸道翁と大東流合気柔術幸道会」、『秘伝』二月号、二〇〇七年。
<http://www.hikarido.com/hikaritaiken.htm> (二〇〇七年二月十六日アクセス) 参照。
- (40) 錦戸武夫、『合する合気 光道 上巻』、大東流合気柔術光道、参照。
- (41) 田嶋(二〇〇五) 参照。
- (42) 田嶋(二〇〇五) 参照。
- (43) 田嶋(二〇〇五) 参照。
- (44) <http://daijoryu.hp.infoseek.co.jp/keikonaityou.htm> (二〇〇七年一月一九日アクセス) 参照。
- (45) 以下、脚註を付さない」は、二〇〇六年七月九日より実施している一刻館における参与観察にもとづく。
- (46) 初傳之人についての記述は、二〇〇六年七月九日から一月二〇日の期間の得られたデータにもとづく。
- (47) 二〇〇六年二月二四日、錦戸武夫師へのヒアリング。
- (48) 松原(二〇〇六)、一二六頁(「稽古にむかうとき、私は自分の心身を確認できていない。しかし、稽古を終えて帰路の私は、心身を確認している。道場での稽古は、私の総てを曝している『今』である。稽古を終え端座して乱れた息を整えて坐礼を行う時、自我と非自我は同一となる」)
- (49) この他に、「船が海面と一緒に盛り上がるように」、「箸でものを掴んで運ぶように」といった表現が使われるが、意味するところは「相手の力とぶつかり合うことを回避する」という点にあると考える。
- (50) 堀川幸道の系譜にある岡本正剛は、この感覚を「飛行機が離陸するように、ヘリコプターはダメ」という表現で説明している(『大東流合気神伝 第2巻 合気特別講習会編』、BABジャパン、参照)。しかし、こうした感覚の表現は光道系では共有されないといえる。光道ではむしろ「飛行機が離陸する」ような動きは忌避されている。
- (51) この記述は、二〇〇七年八月二日からはじめて一刻館における制剛流抜刀術稽古にもとづく。
- (52) 光岡英稔・甲野善紀、『武学探究 卷之二——体認する自然とは——』、冬月号社、二〇〇六年、四三頁。
- (53) 光岡・甲野(二〇〇六)、六一頁。

- (54) 時津(二〇〇五)、一頁。
- (55) 医療関係職に従事する道場関係者の「細胞のひとつひとつに意識があるような気がする」という発言を考えるならば、この感覚は私の主観によるものとは言い難いと考ええる。
- (56) 南郷継正、『武道修行の道——武道教育と上達・指導の理論——』、三一新書、七七—八四頁参照。
- (57) 高橋(二〇〇四)、一七頁。
- (58) 「たしか大正一四年念の春だったと思う。私が一人で庭を散歩していると、突然天地が動揺して、大地から黄金の気が吹き上がり、私の身体をつつむと共に、私自身も黄金体と化したような感じがした。それと同時に、心身ともに軽くなり、小鳥のささやきの意味もわかり、この宇宙を創造された神の心が、はっきり理解できるようになった。その瞬間、私は『武道の根源は、神の愛——万有愛護の精神——である』と悟りを得て、法悦の涙がとめどなく頬を流れた」(植芝(二〇〇二)、四七頁参照)。
- (59) 「私(錦戸)は六年前(一九九五年—平成七年二月八日)に太陽そのものが体に飛び込んできた体験をした。(この時私は超至福感の中にいた)今も太陽に向かうと太陽そのものが飛び込んでくる。それは想像を絶する強力なエネルギーである」(<http://www.hikarido.com/hikaritaiken.htm> (二〇〇七年十二月十六日アクセス) 参照)。

(二〇〇七年十二月十九日受理、二〇〇八年一月十五日採択)